



図2 計画内容のまとめ

# 都立芝公園「もみじ谷」復元をめざして ～近代公園の先駆者 長岡安平のしごと～

浦崎 真一

(公益財団法人東京都公園協会公園事業部技術管理課研究開発係)

## 1. はじめに

明治6(1873)年1月15日、太政官達第16号が布達され、芝増上寺境内とその周辺が公園として位置づけられた。これが都立芝公園のはじまりであり、日本の公園行政のはじまりである。以後、明治13(1880)年から公園としての整備がおこなわれ、明治31(1898)年には管理を東京市に移管し、明治38(1905)年から明治39年にかけて紅葉滝が整備された。現在のもみじ谷である。明治39年の完成であるから、平成28(2016)年には110周年を迎えることになる。この芝公園紅葉滝を設計したのが、近代公園の先駆者と呼ばれる長岡安平である。

本稿では、都内で唯一設計当時の面影を残すといわれる、もみじ谷の復元に向けておこなった平成21年度から平成23年度までの調査結果を、設計者長岡安平という人物像を含めて報告したい。

## 2. 紅葉滝・もみじ谷の成り立ち

### (1) もみじ谷の成り立ち

都立芝公園もみじ谷(19号地)は、東京都港区芝公園4丁目地内、東京タワーに隣接する紅葉滝と溪流を中心とした落ち着いた空間である(図1)。

もみじ谷の西側、現在東京タワーの



図1 もみじ谷位置

あるところ(旧20号地)は、徳川2代将軍秀忠の時代に江戸城内紅葉山にあった「金地院」をこの地に移す際、紅葉山の由来となったモミジを分けて植えたことから、こちらも「紅葉山」と呼ばれるようになった。以後、明治14(1881)年に会員制の高級料亭「紅葉館」が建設され、東京名所図会にこの様子が記されるなどひとつの名所となっていた。<sup>1)</sup>

こういった流れの中、明治38年、19号地に紅葉滝が長岡安平によって設計された。当時の新聞記事から紅葉滝設計の場所を選定した理由を推測すると、以下のような点が挙げられる。

- ① 上野公園は山谷をかかえているが開発が進み適当でない。
- ② 芝公園の19号地は、まだ深山幽谷の風が残っている。
- ③ 19号地には明治14年頃まで滝があった。

- ④ 元々水が湧く地形、地質であり、滝があっても違和感がない。
- ⑤ 地形がそのようであるので新たに滝を造る費用が安くなる。

またこのほかに、当時芝公園18号地にあった府知事官舎の脇に安平が居(長柏園)を構えていたことも関わっていると考えられる(写真1)。



写真1 18号地長柏園跡碑

### (2) 紅葉滝の設計

紅葉滝への関心の高さは竣工前後の新聞記事からうかがい知ることができる。明治38年の新聞各紙には「芝公園未来の新景」として挿絵を載せるなどその期待の大きさがみられ、竣工後の明治39年3月の時事新聞には「宛然深山」や「幽邃」といった表現で完成を伝えている。

紅葉滝整備は東京府の事業として、設計・監理長岡安平、工事主任技師藤原八十吉、現場監督井下清、施工期間明治38年11月から39年3月、工事費4,428円90銭(予算2,500円)という概要で実施された。仕様は次の通りである。

- ・滝の高さ9間5分(17.1m)
- ・滝壺より2尺(60cm)の高さに中段
- ・中段の奥行4間(7.2m)幅6間(10.8m)
- ・滝壺面積10余坪(約33㎡)奥行3間5分(6.3m)幅3間(5.4m)
- ・滝は東向き
- ・石材は府内工事で発生したものを主に使用
- ・滝壺はコンクリート造、廃物石で飛石を打つ(丸平石)
- ・滝壺から弁天池までの流れ156間(280.8m)幅6尺から2尺(1.8から0.6m)底はコンクリート造モルタル仕上
- ・流れに2ヶ所土橋をかけひとつは馬車道幅1丈(3.0m)長さ2間(3.6m)
- ・両岸にはササ、アスナロ、ヤツデ、アセビ、キンシバイ、ビョウヤナギ、ノギク、ハギ、リュウノヒゲを植栽
- ・高木はカエデ100本、シイノキ80本、モミノキ70本他常緑樹
- ・その他

当時の設計図(巻頭カラー)にはこれらの仕様が表現されていることがわかり、竣工時の写真(写真2)からも「宛然深山」と表現された雰囲気伝わってくる。

### 3. 長岡安平の人物像

ここで紅葉滝を設計した長岡安平の人物像について簡単に触れておく。

#### (1) 長岡安平の略歴

長岡安平(写真3)は天保13(1842)年、肥前大村藩(現在の長崎県東彼杵町)藩士の家に生まれ、幼少期は病弱で学問武術は好まず、花卉草木の栽培、小鳥鶏類の飼育をしていたが、しだい



写真2 竣工当時の紅葉滝

に体調が良くなってからは造庭に興味に向いていったという。造庭の研鑽は特定の師に教えを受けたのではなく、自然の美、造化の妙を手本とし、各地の景勝地や名園を訪ね、庭園に関する古書を読んで自らおこなった。

維新後の明治3(1870)年、同郷の先輩楠本正隆に従って上京し、明治5(1872)年に正隆が新潟県令に就任するや同道し、明治8(1875)年東京府知事に栄転するに及んで再び共に上京して、明治11(1878)年に東京府土木掛に奉じた。そこでは専ら公園設計



写真3 長岡安平

斜面地の補強と階段整備も必要であるが、既存樹木はできるだけ残し、安平の設計を極力残すかたちで進めなければならない。

植物に関しては、現在ムクノキ、ミズキ、ハゼノキ等の落葉広葉樹の高木、アカガシ、クロガネモチ、ツバキ等の亜高木、トウネズミモチ、シュロ、イヌビワ等の実生木が繁茂している。これらに対して滝周りのモミジが少ないため、実生木は除去し、繁茂した高木は枝下ろしや剪定をおこない、その上でモミジ等の景観木や低木、地被類の植栽が必要である。

#### (2) 溪流及び溪流沿いの整備

溪流についても長岡安平の作風を示す記述が見られ、「溪流は多くは池に落ちる水の道で両側を崖とした低い所がよい。石を自然に置き、間々に水草類を植えたりして、水の流はあまり緩くない程度にする。両側は灌木又は下草、笹、竹類を適宜に植え、楓樹其他を面白く塩梅する」とある。

これに基づいて溪流を復元するにあたり、特に重要となるのが滝の観賞ポイントとなる合流部である。現在の小滝は滑滝状となっているが、明治39年の写真は二段滝である。しかしながら石組の石は比較的竣工時の写真に見られるものが現在も残っていることから、それらを保存しつつ、できるだけ当初の緊張感ある石組に据えなおす必要がある。あわせて沢飛石は設計図や写真にも見られず、これがあることによって踏み分け道ができることから撤去の方針とする。

植栽の復元としては、実生木の撤去と地被類の植栽をおこない、溪流沿い

は設計意図に従って上流・中流・下流の雰囲気を検討し、特に中・下流部にモミジ類を新植する。モミジや下草の生育環境を整えるためには高木の伐採や剪定も必要となる。そのほか斜面地やポンプピット周辺の修景植栽を合わせておこなう。

溪流湧口は切石を重ねた、安平の作風とは違った雰囲気があるが、井下が『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』で「旧江戸城外濠の石壘が取壊される時に、その石の裏を利用して公園の大小の岩組に利用されたことから廃石の利用に興味を持たれ、大形の間知石又は方形の切石は翁の手に依って千金の庭石として見事に取扱われたことは頗る興味深いことであった」と述べており、当初のものである可能性もある。よって湧口については石組を変更することなく、中低木や地被類の植栽によって修景をはかる。

階段と園路については、土が踏み面にたまったり、傾きができたりして滑りやすい階段や、踏み分け道が見られるため適宜補修するとともに、現在コンクリートとなっている橋をかつての土橋に戻すことも検討する必要がある。

#### (3) 案内板・解説施設の設置

もうひとつ検討の必要があるのが、案内板や解説施設である。これまで述べてきたとおり芝公園もみじ谷は貴重な歴史資源であるため、広く来園者に周知しなければならない。このため復元と同時に案内板や解説施設を設置する。

もみじ谷の動線としては東京タワー側から園内を通り抜けるものと、日比

谷通り側から広場に入り休憩や滝を觀賞するものの2タイプがある。これを考慮しながら案内板あるいは解説板新規を5基程度、また既存案内板の更新をおこなう。内容は芝公園について、もみじ谷と紅葉滝、長岡安平等とする。また新植したモミジの品種案内板や樹名札等も検討しなければならない。

### 7. おわりに

ここまで述べたとおり、芝公園もみじ谷の復元には多くの項目が含まれ、まとめれば図2の通りである。これだけの復元作業であるから当協会のみでおこなうことは難しく、サポーター基金での市民の賛同や、東京都の協力なくしては成しえないであろう。しかしながら公園設計の先駆者長岡安平の作品でこれだけ当初の面影を残し、また当時の資料にも恵まれた事例は他に見あたらない。もみじ谷を貴重な歴史資源として、また「文化財公園」として未来に伝えるため、本稿で述べた計画を実現できるよう、今後も尽力していく所存である。

#### 補注

- 1) 芝公園整備に関しては上田恭幸(2003)「芝公園整備について」、『都市公園』No160、東京都公園協会、pp.35-45に詳しい。
- 2) 長岡安平に著書はなく、「井下清(1926)『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』文化生活研究会」に掲載されたものが唯一まとまったものとされる。

#### 参考資料

- ・財団法人東京都公園協会(2009)『芝公園もみじ谷景観復元基本構想案作成委託報告書』
- ・財団法人東京都公園協会(2010)『芝公園もみじ谷景観復元計画及びパンフレット作成委託報告書』

に当たり、明治31(1898)年に東京市に転職して以降辞職再任を繰り返しながら大正3(1914)年までの間、東京市の公園設計に関与した。

また、明治35(1902)年には逓信省営繕課事務を嘱託され、大正8(1919)年に至るまで各地の公園設計や個人庭園の築造も数多くおこなった。

## (2) 安平の作風と公園設計の考え方

長岡安平の言葉は『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』<sup>2)</sup>に自序として、「予のやる方なき造庭研究の心は予を馳りて天地自然の景致と親しむに至らしめぬ。予は此処に最良の友を得、最善の師を見出して内心の躍動止む事を知らず、深く自然の境に分け入りて一人自然の観察研究に耽り以て聊か自得するところありき」とある。安平の生まれた東彼杵はいくつもの滝や「龍頭泉」という景勝地があり、非常に自然豊かであるとともに秀でた景観が多い土地柄である(写真4)。安平の言葉通り自然を師として庭園を学ぶには恵まれた環境であり、ここで養われた感覚がその後の設計に生きてきているであろうことは否定できない。



写真4 観音滝(東彼杵町)

長岡安平の作風や公園設計の考え方は、『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』に掲載されているほか、井下清らが作風について記述している。それらによると概ね次のような内容にまとめられる。

- ・公園は公開的であり、平民的に
- ・自然の地形をできるだけ利用する

- ・適宜和洋折衷を施す
- ・山水の景は陰陽ということに注意し、変化に富むよう設計
- ・その土地に適した自然木を植栽
- ・軟らかい野筋の庭を好み、景物の少ない野趣の溢れた寂びたものが得意
- ・穏健な自然風を基調
- ・日本の自然風土、地域の文化を踏まえた実にナチュラル、嫌みのない日本的空間と風景
- ・逍遙的景観デザイン

このような作風と公園の考え方をもち、さらにまだ公園がやっと作られ始めた当時、すでに公園の経営という考え方や、ユニバーサルデザインにつながる考えなど先見の明も持ち合わせていた人物である。

## 4. もみじ谷の現況

### (1) 竣工以後の経緯

明治39年に紅葉滝が完成して以来、震災、戦災を経て紅葉滝も原形はとどめているものの滝の一部が崩壊、流れは土砂で埋まっていた。この状況を受けて昭和59(1984)年、市民の要望もあり滝、流れの崩壊を防ぐため、東京都南部公園緑地事務所により改修工事がおこなわれた。この時の主な改修点としては、滝に関しては左岸の崩落の補修と新たな石組、滝落ち口の手直し、流れの方向の強調、滝組石背面の空洞充填、中段の床上げと飛石の据え直し、滝口への水の循環供給、流れについては堀戻しと床整備、護岸への石追加と流末付近の石組の更新、循環装置の設置などである。

昭和59年の改修時にも手を入れているが、造成当時からの小さな崩壊と滝組石の背面土の流出がたびたび問題となり、平成5(1993)年の秋、規模の

大きい滝中央部の崩壊が起こった。これは長雨や実生木の根が原因と考えられるが、調査の結果滝石組背面が全域にわたって空洞化しており、最大1mの奥行きも観測された。このため東京都公園協会では二次災害を防ぐ緊急措置として、グラウト注入処理をし被害拡大を防止した。結果当面の安全性は確保されたが、修景面に問題を残しており、その後大きな改修はされることなく現在に至っている(写真5)。



写真5 現在のもみじ谷

### (2) もみじ谷の現況と問題点

#### ① 紅葉滝

紅葉滝は先述のとおり平成5年の崩壊による緊急的なグラウト注入処理により、修景面で問題を残している。さらに兩岸の裸地化の進行と石組の露出、右岸土留めの景観、少水量、滝の脇からの水のしみ出し、実生木の繁茂、溪流の飛石による中段への踏み分け道の出現などが問題点として挙げられる。

#### ② 溪流

溪流は斜面麓南北方向に、地形になじむ形で自然風に配置されている。しかし、滝と溪流の合流部は滝を眺める重要地点として景観を整える必要がある。また溪流の流出点や、流末のポン



プビット周りは改修や修景が望ましい。

### ③ 広場・園路

広場はもみじ谷の中心となる場所であるが、やや滝や溪流との関連が薄く、眺められる地点も設定されていない。

園路は滝のある斜面地に多く整備されており、滝や溪流の間を縫って歩く動線は変化のある景観で、自然風に設計されたもみじ谷を楽しむことができる。ただし急傾斜の斜面に取り付けられた園路であるため、階段のずれなどによって滑りやすく、危険な箇所も見受けられる。また、園路を歩くことによって視界に入る斜面地も、崩落や裸地化、土留めなどが目立つところがある。

### ④ その他

歴史あるもみじ谷のある19号地であるが、園外から誘導する仕組みが不足している。紅葉滝自体は園外から見えず、まず園内に入ってもらおうことがもみじ谷を楽しんでもらう第一歩だが、いずれの入口ももみじ谷へ誘う魅力的な入口とはいえない。また、案内板やサインも更なる充実を図る必要がある。

## 5. もみじ谷復元のための構想

### (1) 長岡安平の設計意図

紅葉滝復元にあたり、長岡安平の設計図や写真は参考になるところが大きいが、設計意図を記した資料はなく、当時の新聞記事がいくつか伝えるのみである。その中から推察すると、次のようなことが挙げられる。

- ・芝公園に風致を添える瀑布を造る。
- ・「芝公園の新風景」を造る。
- ・かつて滝があったが涸れてしまった。滝は市中には珍しい公園の一

景であり、滝を造るに適した場所である。

- ・公衆の耳目を楽しませる深山幽谷の景を造る。
- ・滝は鬱蒼とした丘上から落下し、自然の趣致を保つため岩石に何度も当たりながら流下する屈曲を造る。

### (2) 復元の基本方針

長岡安平は都内で飛鳥山公園、浅草公園、芝公園、両国公園、虎ノ門公園、数寄屋橋公園、今戸公園等の設計を行なった。これらの中で芝公園もみじ谷の紅葉滝および溪流はほぼ当時と同じ形態で現存する都内唯一のものであり、修復はなされているとはいえ安平の作風を今に伝える作品であるといえる。このことからもみじ谷の景観復元には、ひとつの文化財的価値の保全として位置づけ、オーセンティシティを考慮した「文化財公園」の復元を基本方針とする。具体的な復元のための基本方針を次の4点とする。

- ① 長岡安平の作風を踏まえた復元
- ② 紅葉滝・溪流が主役のもみじ谷
- ③ 誰もが利用でき、快適で美しい歴史的公園としての整備
- ④ 周辺まちづくり主体への発信

### (3) 基本構想の方向性

復元のための基本構想としては、もみじ谷全体を当時の設計図に基づき完全に復元するということが考えられるが、これには資料の不足や周辺環境の変化等課題が多い。そこで比較的資料が多く、オーセンティシティのある紅葉滝と溪流を復元するという部分的復元を基本構想とする。

### (4) 計画策定にあたっての方針

基本構想に従って次のような方針を立て、それぞれ詳細に復元計画を作成することとした。

- ・紅葉滝の景観復元
- ・溪流及び溪流沿いの整備
- ・案内板・解説施設の設置

## 6. もみじ谷景観復元計画

### (1) 紅葉滝の景観復元

『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』には、安平の滝や植栽についての設計思想・作風が記されている。

滝については次のようである。「滝を作る時には清水の自然に流れ出る様な場所を選び、岩と岩の間から洩れ出るように水を出し、その水の当って砕る具合のよい様に不規則な自然石で絶壁をつくり、両側には植物を密植する。滝壺には小石を敷き、滝の水が一時落付いてから再び流れなり池なりに注ぐ様にする。」また植栽については「其土地に適したる自然木と断言して差し支へないと思ふ。(中略) 自然に従ふのは樹木を最もよく発育せしむる事であり、かくして成長したものには無限の面白味があり(中略) 在来其地方に多い樹木灌木を植うるのが最も自然で、殊更に珍木を取り寄せたとて、其土地に適さないもの、栽培は困難であり、且それがある為に風景を佳くするという場合は殆どないのである。」と述べる。これらの作風を考慮し、復元を計画する。

竣工当時と比べると現在の紅葉滝は直線的に落下しており、経年による崩壊や浸食が原因と考えられる。傾斜角は80%以上、高低差は14mで崩落の危険もあるため、根本的な改修と復元が望まれる。(巻頭カラー)

滝躯体の改修方法としては、滝部分に擁壁を設置し、石を組みなおす方法が考えられるが、施工が困難であるため、パイルによる補強土工法が有効であると考えられる。これと同時に周囲